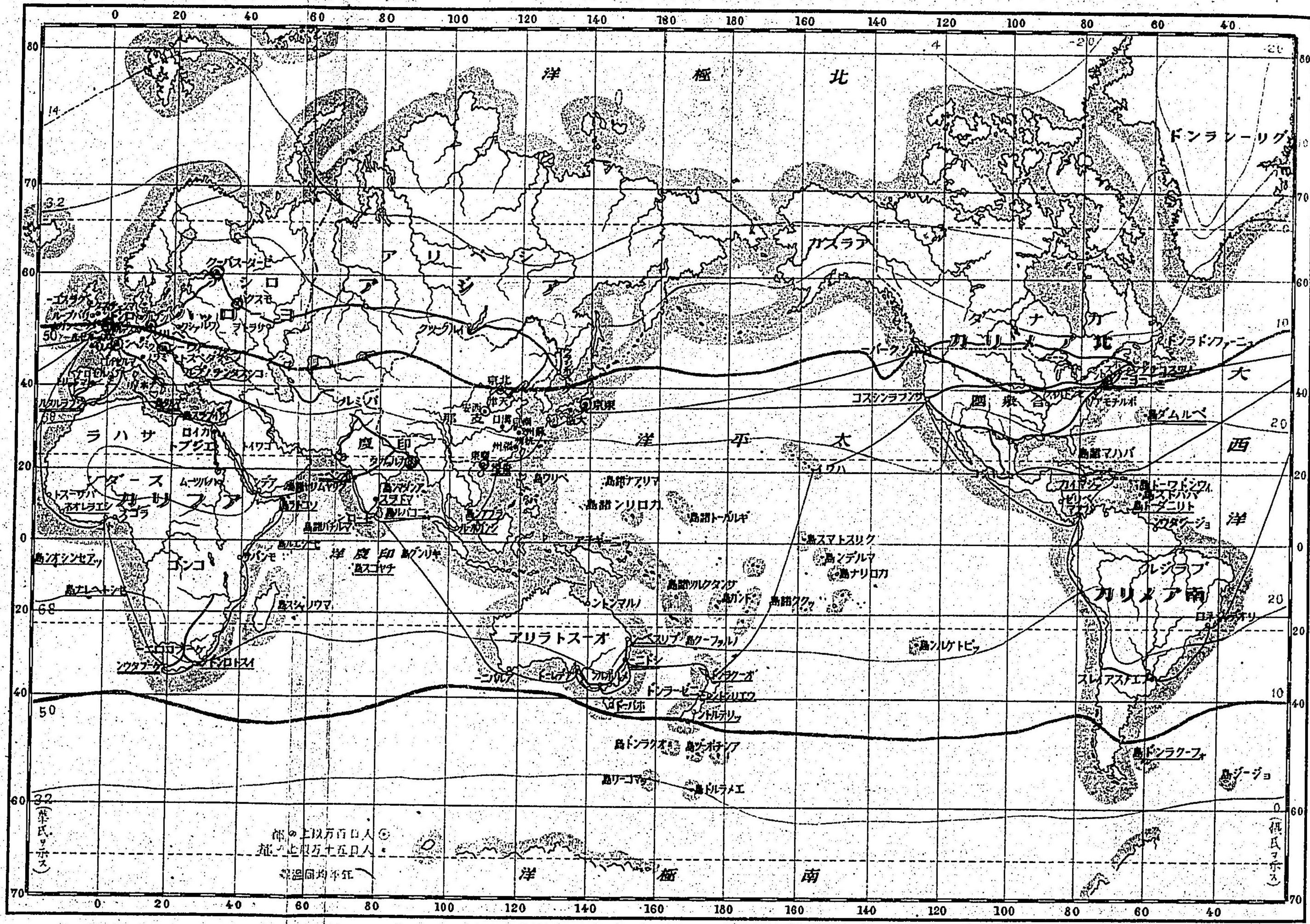
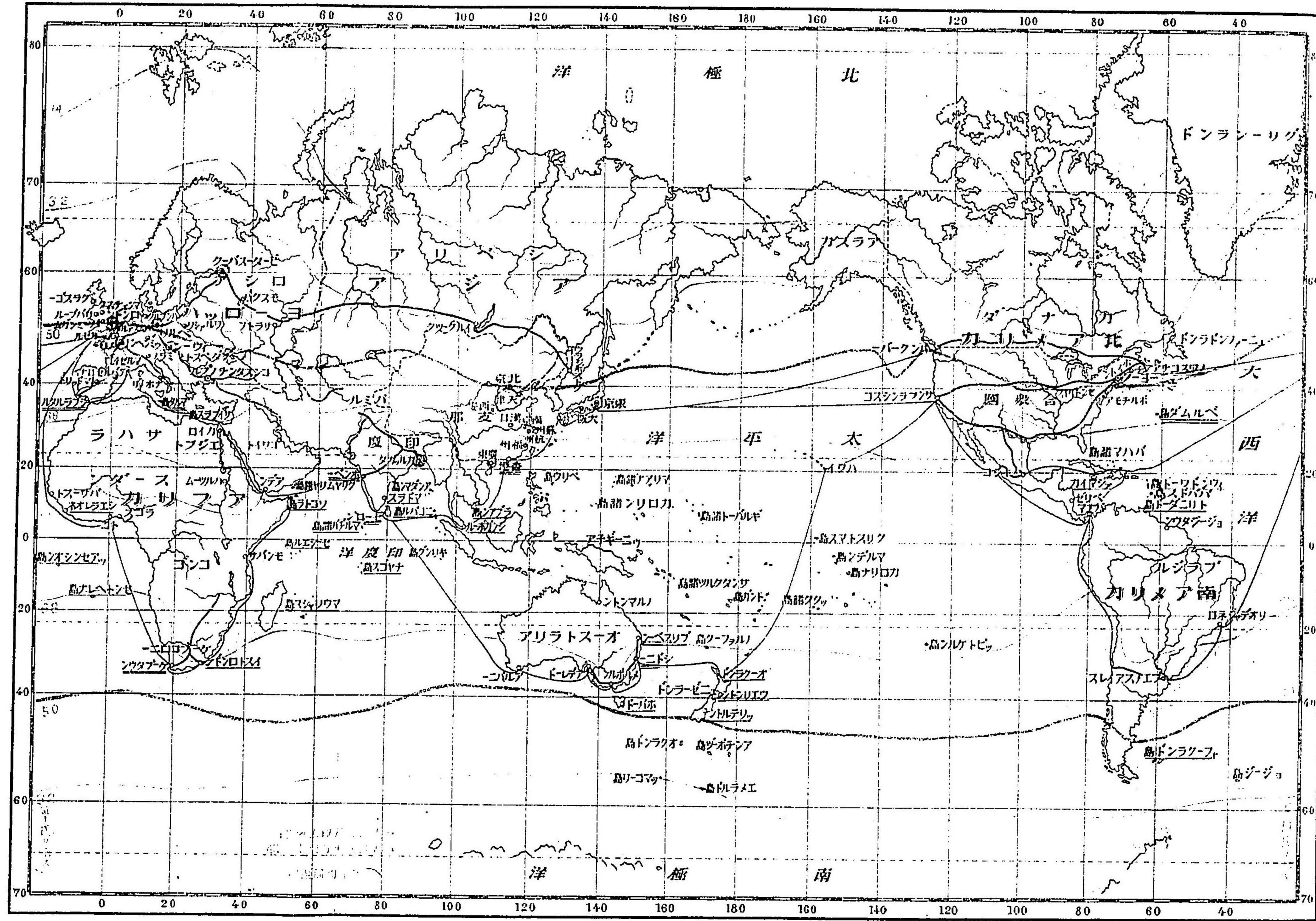


世 界 文 明 の 中 心



世 界 文 明 の 中 心



圖版「世界文化中心點」参照

文化の中心點たり。然るに都府の影響區域の廣狹には夫々幾多の階級あるが故に、此等の都府は皆夫々其影響區域内に於ける文化の中心點たり。即ち國都は其國の中心點にして洲都は其一洲の文化の一中心點となり、世界都は全世界文化の一中心點なり。是に由て之を觀れば現世に於ける文明の中心點は各國に於ける大都會の所在地に在りと云ふを得べし。試みに世界の五十萬以上の大都會を觀るに別紙挿圖の如し。

最も交通の便宜なる所は最も人口の多き所乃ち最も文明中心點の大なるものなり。今緯度上に於ける百方以上の人口の大都會を觀るに歐洲に於ては北緯四十八度より北緯六十度の間にあり、尤もコンスタンチノープルは北緯四十二度にあるも、是れ亞細亞的民族の都府にして従ひて其成立も亞細亞的なれば寧ろ亞細亞の内に入るゝこと適當ならん。次に北米に於ては北緯四十二度の内外に在り、亞細亞に於ては北緯二十三度より同四十度の間にあり、其中の廣東は恰かも歐のコンスタンチノープルの如く殆んど現在文明の中心點たるを失へるの觀あれば、北緯三十

九五八  
六度より四十度迄と云ふを以て適當とす。海陸の配置上より見るに大陸の西岸にては北緯四十八度より六十度に達し大陸の東岸にては北緯三十六度より四十二度に達せり。更に之を同温線に對照すれば廣東とカルカタとを除けば攝氏二十度と零度との間にあり而して其大部分は其中央なる十度の等温線の附近にあり又た之を第十九章のスーパン氏の氣候帶に對照するときは正しく其温帶内に在るなり更に地形上に於ける位置を見るに何も水路の沿岸にありて就中大部分は海岸にあるを見る是を以て現今の文明中心點が地球の如何なる部分に存在するかを知るを得べし。

## 第二節 文明の中心點の移動

古來世界に其影響を及ぼしたる文明の中心點は必ずしも一地方に固定せず時勢の變遷と共に移動して遂に現今の中心點に到達したるものなり然らば其發起點は如何歴史の告ぐる所によれば大古に於て最も早く文明に進みたる點に四地あり是れを最古文明の四大中心點と稱せり。

### 一 ニール河の沿岸

埃及文明

### 二 エウフラトチグレス河の沿岸

アッシリヤ、バビロニア文明

### 三 インドス川及びガジチス河の沿岸

印度文明

### 四 黄河の沿岸

支那文明

何故に此等の地方が世界に於ける文明の曙光發射點となりしかば前節二十四章第四節の開陳に照して容易に判斷するを得べし蓋し文化の進歩には苟くも人民が其生活上の必要品を支給せられ且つ著しく其勢力に餘剰あるに非らざれば得て期すべからず之が爲には人類は常に既に積成せる財産及び智識の援助を要す若しも之なくは人類の勢力は全然日常の必要品を備へんが爲めに吸収せられ自餘の事業に従ふ能はざるなり是實に人智の未だ發育せず自然力の制壓を脱する能はざる古代の文化が寒涼なる地方に於てせずして暖國に於て發生せる所以なり且夫れ人智は衆人の交通によりて發達す一個人の特段なる經驗は實際によりて他人に傳はり斯くて相互間に融通して茲に全體の智識進歩するも

のなることは前陳の如くなるに古代の交通は先づ河川によりて開かれ  
たることも亦た前陳の如し乃ち温帯南部中にも特に水運の便なる河  
川の沿岸に其中心點ある所以なり而して右四地方の位置を見るに共に  
攝氏三十度——二十度の同温線内に在れば氣候温和に土地亦た沃饒に  
して且つ大河の下流は幾多の小流に分れ許多の溝渠となるが故に一葉  
の輕舟の幫助を藉れば常に國內の大都會の間を周航するを得るのみな  
らず田舎の農村をも尙ほ舟訪することを得是實に暖帯航便の地方が特  
に早く開明に赴きたる所以の主なるものなり

然れども温暖地方に於ける衣食の豊富は人類の或る程度に達すれば彼  
等をして努力奮起せしむるに足らず且つ其氣候の温暖は彼等をして永  
續せる作業に耐えざらしめ其元氣を減耗することは第十九章に於て觀  
察したるが如し是を以て多くは勞働者に從順の性質を養ひ企業家の精神  
を滅し容易に山岳地方及び遠隔せる北部の野蠻民に征服せられ以て最  
下級の勞働に従ひ舊習古慣を墨守し之を以て專横壓制に對する絶大の

保護者なりと思惟し而して現世に於ける生存競争場裏に絶望し此状態  
を慰する爲め現在一切の慾望を抛棄し靜觀超俗光明を來世に求めて甘  
んず斯の如くして太古の文化は問もなく其發達を停止し茲に文化の中  
心點は永く其位置を停むる能はざるに至る此事は亦た所謂夏至線以南  
に文明發達せずとの眞理を説明するものなり此時に當り低温地方の野  
蠻入種は次第に感化を得來り南方民族征服の間に其文化に浴し茲に其  
蓄積せる富財及び智識の援助を得て以て衣食の計をなし生存競争の強  
壓の一方面に免れ之に依て漸次に他の事業に勢力を盡すを得るに至り  
斯くて文化の一層進化したるものを形成するに至る是れ現在の文化の  
中心點が其發起點に比して遙かに高緯度に在るを説明するものにして  
所謂文明の北漸は即ち是れに因る要するに文化の中心點は時代の變遷  
と共に漸次に低緯度より高緯度に移動するなり歐洲に於て中古の文化  
の中心點が地中海の北岸諸國即ち北緯三十五度乃至四十五度の並行線  
内に在るは昭かに此徑路を示すものなり

此徑路は支那に於ては反對の事實を著はせり。即ち支那の文化の中心點は先づ黄河の沿岸に發生し、之より南北に波及し、揚子江の發達は遙かに以後にあり、此事實は一見、文化移動の右原則に反するが如きも、之れ全く地勢上の他の理由によるものにして、大體の趨勢に於ては背する所なし。蓋し地理上原始人類の發生地が亞細亞大陸の中部に在ると前に陳述せるが如し、此等の民族が其祖國を出て、四方に分散するや、揚子江の上流は峯巒重疊し、到底彼等の險陟に堪ふる所にあらず、而して歐洲に於けるか如き、河湖の通路に亞ぐに靜穩なる内海の連絡あるなければ、彼等は止むを得ずして之を避け、輒ち黄河の流に沿ひて東下したればなり。若し夫れ本邦文化の移動の徑路に至りては更に昭著に文化移動の原則を證明するものなり。

然れども文明北漸の此徑路は、之を實際に觀るときは甚だ單純ならず、夫れ社會の進動が物質の運動と等しく、最少抵抗線之方向に従ふことは、吾人の屢々觀察したる所、然るに以上の太古文明の發達地點に連絡せる周

圖の地勢は、頗る複雑し、其中に於ても殊に南北の進動に抵抗すべき東西に連亘する大山脈ありて、其運動を阻礙するあり、之に反して東西の進路を阻障すべき山脈は、南北に於けるか如く、しかく峻峻ならざるに之を助くるに温帶地方の重要な大河の南北に流るものに比して東西の方向に流るもの多し、之に於てか文化は北漸するに當りて、緯度線に沿はずして、即ち最少抵抗線に沿ひて、東西に移動せり、輒ち現在の西洋文明は、其西漸したるものにして、東洋文明は、其東漸したるものなり、斯の如く文明が北漸せんが爲めに、陸地の状態に従つて東漸及び西漸したるが更に其徑路を精査するに、尙ほ一の注意せらるべきものあり、蓋し人類は自然力の克服は常に陸上に於けるよりは水界に於て早く顯はれたることは、前第二十七章に於て開陳したることの如し、而して物質進動の最少抵抗線は常に水路に沿ふが故に、文化中心點の異動は、水界に於ける自然力克服の方向に従つて移動せり、河流の沿岸に先づ其曙光を發したる文化は、繼て内海の沿岸に移り、遂に大洋の沿岸に移り、今尙ほ此沿岸を距らざる也、英

國の碩儒シロー氏がカールリッデル氏の學說に従ひ、宇宙文化は専ら地理上の情態に依りて變遷するを論じて文化の三大時期を劃せるとは、正に此徑路を表はしたるものと云ふべし。

第一、河流時期 河流に沿うて文化の存するもの。

第二、内海時期 即ち内海を圍繞する地方に文化の存するもの。

第三、大洋時期 即ち大洋に沿ひたる國に文化の隆盛せるもの。

現今に於ては鐵道交通の發達によりて、久しく海岸に於て發達したるものを遠く内陸に輸送するに至れり、然れども文化の中心點は未だ海岸を距るの運に至らず、蓋し海洋が交通上に於て尤も至便なる通路たるを失はざる間、又た海洋が世界交通上の公道たるの間は、恐らくは吾人の想像し得べき將來に於ては、其中心點が海岸を距ることなかるべし、是れ實に海岸線の延長と文化の發達との關係が密接するの原則の成立する所以にして、此の原則は將來に於ても恐らくは變更することなかるべきなり、大體に於ては文化中心點の移動は水路に従ふと雖も、更に尙ほ精細に其

經路を観察するとき、其中に於て尙ほ一の其經路を變更すべきものを觀る。地勢の影響は即ち是にて文化の中心は海岸地方中に於ても、先づ地勢の小複雑の地方を経て、漸次に大複雑の地方に移轉するか如きは、是なり、地勢の小複雑なる所は多くは海岸線の小屈曲をなすが、故其延長せる地方と一致すと雖も、而かも必ずしも凡ての場所に於て一致すと斷言する能はざることは、既に第十六章に於て觀察したる所、是れ別論を要する所以、史家は曰ふ、希臘が早く文明の中心點となりし大原因は、一方に屈曲多き海岸を以て靜穩なる内海に臨み、他の先進國民と接觸するの便宜あると共に、他方に於て山脈縱横に連亘し、其間豁谷深く刻まれ、住民いたく分離するか爲めに自ら特質の文化發起の機會を得しにありと、羅馬の地勢は之を前者に比すれば、其稍々規模の大なるもの、若し夫れ歐洲全陸を之を他の大陸に比すれば、大體の地勢の複雑なることは、宛として希臘の擴大したるもの、是に於てか社會學者は文化發達の程度は一地方の地勢の複雑の程度に比例すとせり、吾人の所謂氣岸線の延長、即ち是れなり、要之

文明中心點は頗る複雑なる經路を以て移動するものにして之を左の如く簡約するを得べし。

- 一 文明中心は緯度線に沿ひて移動す。
- 二 文明中心點は東西に移動す。
- 三 文明中心は水路に従うて移動す。
- 四 文明は地勢に従うて移動す。

### 第三節 將來の文明中心點

吾人は既に現今の文明中心點を觀察し其發起點其移動の徑路を觀たり此考察をして謬りなからしめば將來の文明中心點を豫想するは必ずしも至難の妄想にあらざるべし之が爲めに第一に必要なるは文明形成地の極限にあり南半球に於ては人類の棲息すべき陸界は南緯六十度以北にあり南極探險は現今冒險家の熱中する所なるが如しとも之より以南に文化の發達すべき陸地を發見し得べからざるは明かなる所之に反して北半球に於ては陸界は北極圈内に連續すれば問題は其北限を定むれば足る文明形成の北限は如何既往に觀たる文明北漸の勢にして止むなれば文明形成の地には北限なきが如し然れども非常なる寒地に於て生

計を保たんかためには必ず他人と協合するを要するも衣食の資を獲んとするの努力は其發展せらるべき勢力の一切を竭盡して爲めに進歩の機會を得る能はざるは既に第二十四章に於て述べたるが如ければ文明形成地にも亦自ら極限なかるべからず而して其北限は常綠樹森林帶の限界をなす攝氏零度の同溫線は文明隆興の北限とするを得べきが如し之を緯度に觀るに大陸の西岸に於ては北緯六十五度大陸の東岸に於ては北緯五十度以南にあり。

茲に文明盛興の兩極限を得たれば此區域内に於て尤も東西兩文明の接觸地點に位置する國こそ乃ち將來の文明中心と云ふを得べけれ若しもコロンブスの發見したる新大陸として其豫期したるが如く東印度ならしめば文明成形の最高中心點に恐らくは英國なりしならん然るに彼の豫想は全く反して亞米利加は未だ曖昧野蠻人の國なりしが故西漸文明は之が爲めに何等の發育をなす能はずして英國は其粹を集めて更に西漸せしむるに過ぎざり。



時に日本は既に東洋文明の粹を集めたる上に西洋文明に接觸して僅かに三十餘年の間に彼地に於ける百年間に發達せし頂點に近けり然らば島國は文明統合に大なる便宜を備ふと云ふより考ふるも之を文明中心點移動の徑路に觀るも慥かに文明渾成の地點にありと云ふも決して溢美の言にはあらざるべし但た茲に一の逸すべからざる事は地勢移動の徑路なり此點より見れば將來の文明統合地は正に米國にありと言はざる能はず然り其地勢の米國に比すれば小複雑に富むが故に幾多の小國に分割せられて生じたる歐洲の列國は此れが爲めに一時文化の發達をなしたりと雖も今は却つて其れが爲めに停滯の姿にあり然らずとも米國の進歩に及ばざるの形勢あり之に反して北米合衆國は彼の小國分裂者の當然免るべからざる内部に紛雜なく從つて之が爲めに傾注せらるべき軍備の費を要せず大トラストの類りに勃興するによりて知るを得るが如く恰かも歐洲の一國に於けると同様資本を集中して専心經濟活動に勉む是故に英國の富は將た此地に移らんとするの趨勢なり加之文

明が島國に於て渾一せらるべしとの事も亦北米合衆國の文化を立證する者蓋し北米合衆國は洲内に其の勢力を割かしむる一の強敵なきが上他の國との國際間の紛騒に超脱するの便あること英國よりも遙かに好地位にあればなり此點に於て彼は慥かに一の島國なり其實質に於ては歐洲に比敵すべき廣サあるも交通上の便宜に於て古の英國に比して大なる差あるなし米國は實に引き延ばしたる島國なり將來の文明結合點は米國ならんとは此等の點よりして到底否定し能ざる所なり將來の世界の平和は恰かも大なる小字形に排列せらるゝ日米英の三國によりて維持せられ依て人道的競争形式に基きて生すべき文明は發達せらるべきものなるなからんか兎も角も吾人は茲に至りて將來の文明に於ける日本の位置の多望なるを認めざる能はず不知四千五百萬の大和民族は果してよく此天與の地位を利導し得へしや否や

参考書 稲垣清次郎氏「東邦策」 矢津昌永氏「日本政治地理」 世界に於ける大都市の人口は一九〇二年出版の「タッセ、アトラス」による。



結論

第三十二章 地理學の研究法

第一節 從來の記載的地理學の弊害

本邦現今の普通教育に於て數多の諸學科の中地理學ほど憐むべき境遇に在るものはあらざるべし。昔に小學校に於てのみならず、中等教育に於ても地理學と云へば、山川、湖海、人口、都邑等の殆んど理論上の秩序もなく連絡もなく、恰かも目錄然として陳列せらるゝに過ぎず。是の故に之によりて學び得たる學生の腦髓には多くは試験間際に於ける俄か勉強の結果たる一時的斷片の記憶の他、一の纏まりたる智識なく従つて一場の試験を通過すれば殆んど無一物となり、是れが爲めに地理學は彼等に最も面白からぬ學科の一として嫌忌せらるゝものゝ如し。是豈地理學の真相ならんや。斯くの如ければ地理學は日本國民に對しては乾燥無味徒らに學生の倦厭を値ひし、最も實用に遠ざかれる伴食的學科の一として擯斥

せられ、學校に於ては教師の何人たるを問はず、最も閑暇なるもの、兼攝的教授に委せらるゝもの、如し、隨ひて諸種の弊害は之が爲めに生ぜり、國民の著しく觀察力に乏しきが如き總ての階級に常識の缺くるが如き、將た國民の趣味の各自専門の事項に偏して多方に興味を感ぜざるが如きは、蓋し其重なるものにして、皆な之れ真正なる地理學の缺乏に大部分は歸すべきものなり、果して然らば其責は何れに屬すべきか、固より其程度に安んずる一般社會は之れを免るべからざるも、主として之が指導に任ずべき學者其人に歸着するを免るべからず、されば社會は進歩するに従つて何時迄も是れに安んぜず、今や社會は地理學に對つては二つ二つの切れ／＼の記載に満足せず、多少相連絡せる智識を要求し、又た其對象としては單に何れぞやの疑問に答ふるを以て満足せず、何故かの説明を求迫するに至れるもの、如し、地理學は如何にして社會進歩の此要求に應ずべきか、惟ふに是れ正當なる研究法によりて構造せられたる系統的智識にあるべきなり。

### 第二節 科學の研究法

如何にして正當なる研究法を得べきか、是れ總ての科學に共通すべき問題にして、他の先進科學は依りて完全の域に達したるものなれば、夫れを斯學に應用するを以て最も捷徑とすべし、今や各種の科學の發達の徑路を考察するときは、其種類の異なるに従つて其徑路も異なるや論なければども、其間に多少の類似し契合せる點あるを觀るべし、此點こそ總ての學科に共通する眞理にして、總ての科學に應用せらるゝが如くに、地理學にも應用せらるべきものなれ、就中地理學は其姉妹科と見做さるゝ、歴史科(史學科)に最も手近に負ふ所あるべきを見るなり、歴史の研究法に三段あることは斯學の學者の一般に承認する所なるが如し。

第一段 考證的研究法 個々の事實を正確に取調べて、其眞相を明かにし其眞偽存否を確かむること。

第二段 聯結的研究法 第一段の研究によりて確定したる史實を取りて之を同時代の史實を對照し、其相互の間に聯關せる所を明かにし、又た其前後の時代にありし史實を如何なる關係あるかといふ事、即ち原因結果の繋がる所を

發明すること。

### 第三段、哲學的研究法

前二段の研究に依りて得たる結果を總括して、其間にある眞理を發見すること、即ち世界歴史を統一せるものとして全體の上より大觀することによりて人間は如何なる仕方により如何なる方向に發達し來れるかといふことの實狀を知ることにて、歴史家の最終の目的なり。但し人事の複雑なる到底他の自然科学現象の單純なる原素、若くは原則にて律することとは能はざるものなれば、之に一定の天則を發見することが得らるゝとすれば夫は心理學の非常に發達したる後なるは言を俟たず。

ヘーゲル氏が其歴史哲學に於て歴史を第一原始的歴史、第二考察的歴史、第三哲學的歴史に區別せるものも畢竟右の趣旨と略ぼ異なる所なし。蓋し此研究法は單に歴史科特有のものにあらずして、一般科學の全體に適する所のものなり。即ち右の三段の順序は總ての科學に通じ、其科學の完成に達する迄の必然の徑路を示すものゝ如し。此のことは吾人が少しく一般科學の發達して、終に完全なる統一躰となれるものについて觀察するときに、容易に發見せらるべき所なり。進んで自然科学の發達の徑路を遡源するに、何れも其基礎を斷片零碎の記録、其他の材料に置かざるは

なし。此等基礎的記録若くは材料は單に一般人類の好奇心、若しくは偶然の機會により遺存せられ、若くは採集せられたるものにして、此時代は於ては固より特殊なる一科學の領域に入るべきものにあらず。然るに特別なる趣味を有する所謂物好きの起るに當りて、此等の斷片なる材料を比較し、其異同によりて之を彙類し、其彙類したる一群の材料を更に比較して上級の彙類をなし、斯の如く層々上級に進んで止まず、斯くして其各級の程度に於ては、其の下級に於ける個々の事實又は觀念中より、夫れ等の全體に共通する事實又は觀念を抽出するに至る。これ實に其れ等個々の事物に共通する原理若くは概念と云ふべきものにして、其が層々上進して終に非常に博汎なる多くの場合に適用せらるべき原理原則となるなり。此の所謂歸納的方法によりて吾人の有する多くの智識が成立せると同じく、其智識の系統躰たる諸科學も亦た斯くの如くして成立するものなり。吾人の智識形成の徑路、斯くの如くして學科發達の順序亦た斯くの如しとすれば、自然科学の原則に包括せらるゝ、地理學の研究法も亦た之

に従はざるべからざるは明かなる所なり。されば吾人が次に攻究すべき問題は、其適用如何にあるなり。

### 第三節 地理學研究の順序

一般科學に共通なる研究法を地理學に適用するに當りて、先づ此科の發達の順序を顧みるは無用の觀察にあらざるべし。現在に發育し來りたる地理學も其源に遡れば他の學の材料詰若しくは歴史の記録に於けるが如く、其基礎を旅行記或は風土記等の斷片なる記載に置くことは疑ふべからざる事實なり。而して其記録も初めは單に偶然若しくは好奇心にかられて爲したるものなるが故に、各地の相異なる奇事、異聞を集めたるものなりしが、次第に特定の目的を有する旅行起るによりて、其記録の事項も亦た其目的に應じて變化せり。此等の特定旅行の先驅とも云ふべきものは戦争にして、次ぎは商業的旅行なり。されば此時期に於ける記録事項も幾分か商業上の實用的記事となる。斯くて地理學の源をなす。

### 第一步記載的研究法

交通稍開け、以上各地の斷片なる智識の多少豊富となるに至りては、人間の欲望は此等の智識を斷片のままに置くに満足せずして、此等各地の材料中のものを比較し、異同を別ち、類似のものを彙め、別異のものは他の類別をなして、依りて、以て稍、整頓したる記載を得るに至る。都會、人口、産物、山川、名所等の項目を設けて、其中に包括せらるべき事項を彙集したる所謂往時の地誌なるものは、即ち之れにして、地理學の形成後の第一步記載的研究とするを得べきものなり。現今の本邦の社會に於て地理學といへば山川都邑産物等の記載と誤解せるか如きは、其未だ第一步の程度を脱する能はざる證と見るを得べし。以上の地理學の吾人に教ふる所は、各地の事實をありの儘に、何々なりとの單純なる皮相的説明に留まる。是れ既に現今の人心の欲望を満足せしむべきものにあらず、されば社會は、其は何故なりやの疑問を答ふべきを地理學に要求して止まず。此要求を滿すが爲めに地理學は如何に變化すべきか、之を史學の發達に鑑み、其他の科學の成立に考ふるに、地理學の發達には尙ほ二個の上進すべき階段あるが

第二步聯結的研究法

如し。第二步聯結的研究法 第一步の研究によりて確定したる事實を取り、之を同一地方の他の地的事實に對照し、其等相互間の聯關したる所を明かにし、殊に住民と自然との聯關したる所を明らかにし、其間の原因結果の關係を推究すること。

第三步科學的研究法

第三步科學的研究法 前の二歩の研究法によりて得たる結果を總括し更に人類の必然的性情を鑑みて、總ての地的現象と人生との關係の理法を發見すること、及び其の發見せられたる真理によりて更に各地方の地の關係を解釋することは是れなり。

第四節 地理學の研究法

地理學の研究法は尙ほ之を以て盡せりとすべからず、以上は單に科學成立の順序により、吾人の心意の作用上、必然の徑路と思ふ、研究の順序を説きたるのみ、吾人は右の如くして成立すべき科學的智識を正しく得る手段を得んが爲、及び之を收得するに當りて最も經濟的(最少の勞力を以て

心理上より見たる地理學の要素

最大の量を得る手段を得んが爲、及び斯くの如くして收得したる智識を最も永く記憶し、且つ他日其智識を應用する場合に於て最も確實に、最も迅速に取り出すことを得べき手段を得んが爲に、及び此等の手段を用ふるに當り、最も心力を經濟的に利用する上に於て、吾人は斯學に於て尙ほ研究法を講ずべき幾多の必要の存するを見る、然るに是れ未だ從來に餘り多く注意せられざるが如し。

如何にして以上の要求を充たすべき手段を發見するかの問題に入るに當りて、吾人は地理學を收得し、了解し、記憶するに當りて要する心力上より其要素を分解し、其各要素に對する心意の活動する状態を反省するは避くべからざることにして、又た必要の事たらざるべからず、吾人が地理學を研究するに就て特に要する心力の上より地理學の要素を分解するに大約左の如し。

一、自然界、人生界の現象の具體的觀念及び抽象的觀念、并に其等に對する固有名詞、普通名詞、反言すれば地名、物名等。

二、右の現象の分量、程度、性質及びこれ等に對する名稱、數字及び形容詞等。

三、人生現象と自然現象との關係の智識及び之に對する原理原則。

四、空間に對する觀念及び之に對する距離。

さて此等の要素に對して吾人の心意は如何なる作用をなして、地理學の研究を遂ぐるかと云ふに、

一、以上の各項に通ずる觀念、即ち一般の地理書中に著はるゝ地的現象及び人生現象を了解するの基礎的觀念は、吾人が日常生活する郷土の自然界及び人事界を觀察し、之を比較し、抽象するに依りて得べし、而して此基礎的觀念の中に、同種類の各地の觀念を結び付け、同化して以て自己の智識となす。

二、自然界及び人生界の現象の觀念、及び兩界現象相互關係の觀念は、郷土に於ける前項の基礎的觀念及び原則の適用によりて了解せらる。

三、前項の了解せられたる智識及び其他の地名、物名、距離等は吾人の記

憶の種々なる連絡によりて心意に固着せらる。

右の心意作用を反省するによりて吾人の地理學研究の正當にして且つ確實なる方法は案出せらるべし。

一、第一に必要なは基礎的觀念なれば吾人は先づ郷土に於ける手近かなる自然界、人事界の現象を注意し、觀察して、基礎的觀念と原則とを得べきなり。

二、本國及び世界の地理的事實を注意するに當り、精細に其原因結果の關係を考察して以て彙の原則が如何に行はるゝかを考察すべし。

三、如何にして最も確實に記憶すべきかといふに智識の間に種々の連絡を付するにあり。

其最要の連絡點にして凡ての智識の連絡の中心は地圖なり。觀念も、地名も、距離も悉く之に連絡して記憶するを得。惟ふに地圖は之か研究者に對して不思議の効力を有す。故によく地圖を觀るの眼(即ち地理學の原則)を有すものならば之をだに見ば他の詳しき説明を俟たずとも某

地方の自然現象は勿論之に關係する人生現象の大體は想像するを得べし。地圖は實に地理學攻究に柱礎たるのみならず、現在活社會の趨勢に注目するもの、坐右に缺くべからざるものなり。吾人は切に彼の東洋流の粗放なる空論者たるの傾向ある國民に今少しく地圖の普及せんことを祈るものなり。

地名は其起原を探ぐるによりて容易に或るものは地圖と連絡せしめて記憶することを得、然れども多くは地圖の反覆によりて自然に連絡するを俟たざるべからず。

距離及び分量に對する數字は其最も重要なるもの、大體のみを郷土若しくは他地方の同種類(類似若しくは反對)の事項と比較し、また連絡せしめて記憶すべし。

其他の一般に關するものは

一、恰かも郷土觀察によりて基礎的觀念を得ると同じく其好む所の一番を反覆精讀するによりて基本的正確なる觀念を得べし。

物産の記憶法

二、日常の新聞紙上、官報等に表はるゝ地理上の現象に不斷の注意をなし、事苟しくも地理に關するものは必ず地圖に對照し、之によりて之を了解し、前條の連絡によりて記憶すべし。

物産は地理學中の重要部分として記載せられ、従つて其記憶に困難する所なれば尙ほ少しく細説するの要あらん。物産中、地名と連絡して記憶せらるゝ者少からず、地名の冠せられたる物産、そが生産によりて以て地名を發顯せしめたる物産等は地名と共に地圖に連絡することにより、吾人の心意に記憶せられ、従つて其れに連絡せる其他のことを思ひ出すことによりて容易に意識に浮び出づるものなるが故に、此等は特論を要せざるべし。其他の物産に至りては地名と連絡すること甚だ薄弱なり、殊に一の地方に格段に顯著ならざる數多の物産の並存するときに於て然り。而して斯の如き物産は多くは他の地方にも同様に之を産するを以て更に吾人の記憶を錯亂せしむるものなり、従つて之れ學生の地理學中に於ける一厄介物として苦しむ所の如し、されど之れとて全く法なきにあらず。



家庭に於ける日用品の出所を注意し、依つて以て庭宅内に一小産物園を假想するがときは手輕の方法なり。備後表の盥に座臥し、瀬戸燒の陶磁器を以て飲食し、九谷、唐津の磁器に、京都製の鐵瓶の湯を注ぎて煎じたる一服の宇治茶により疲勞を慰し、北陸諸國の白米を常食となす、吾人現時の生活は、決して往時の如き狹隘なる一小郷土内の生活にあらざること。是本卷の劈頭に於て觀察したるが如し、此の如き注意を以て四隅を見渡すときは標本を達さに求めずとも數十坪の家庭に於ても全國地理の小模型を想像すること難きにあらざるべし。若し夫れ狹隘なる家庭に代ふるに稍、廣き郷土の一小社會を以てするときは更に妙なり。隣りの吳服屋、向ひの酒屋、彼處の穀屋、此處の瀬戸物屋等は皆夫々人生に重要な内外の特産を陳列すればなり、之を彼の標本の特製を要すべき他の學科に比ぶれば其便否の差幾干ぞや、斯くして吾人の日常親近する物品を産地と連絡せしめ、更に其産物に其原因と結果との智識を連絡せしめ考ふるときは常に物産の記憶に便なるのみならず、物産に因との關係をもつ一國地

理の吾人に最要なる部分をも狹隘なる家庭將た郷土に於て容易に確實に且つ面白く攻究するを得べし。

### 第三十三章 地理の意義及び範圍

#### 第一節 地理學の定義

地理學の意義を確定することは本書に於ける最大至難の問題たり。斯學専門の大家を以てしても猶ほ且つ之を難んじ、未だ古來よりの紛々たる衆說に歸一の點なきが如し。然るを况んや乳臭黃吻の吾人に於てをや、然りと雖も世既に地理學なるもの存し、且つ斷えず一定の方向に進歩しつゝある以上、假令其意義に於て確然歸一の抽象的表出なしとするも、而かも其間に於て暗々の裡に一般社會に承認せられ要求せらるゝ、或る契合點なかるべからず。若し此契合點が那邊に存するかを發見するを得ば、自ら其意義は確定せらるべし。果して然らば事情は正に本書の初頭に於けると異なるなけん。

吾人既に敢て揣らず斯學の攻究に従ふ。早晩此問題の解説に陥み入らざるべからざる所否。實に劈頭第一に接觸するとは免るべからざりし所。是に於てか吾人は餘儀なく良かれ悪かれ此問題に對する一の見解を下し、以て歩行の進路となしたりき。唯だ問題はしかく容易く解決せらるべきにあらざれば、一の假定として輕過したりき。而して若し斯かる假定に違ひて進行するを得、そが果して在來の所謂地理學の全般と、其に對する新要求とを網羅するを得ば、自ら疑問は確定せらるべしと、何となれば、既に暗々裏に默認せる者を、抽象的表出によりて陽に承認するに過ぎざればなり。斯くの如く信じ且つ行ひ、以て以上の三十餘章を得たり。固より未だ蕪雜杜撰は免るべからずと雖も、兎も角も粗ぼ豫定の如く一種の系統的智識の成立に近づけりと信ずるも不當にあらざるべし。即ち地理學の意義を定むるに、當ての第一疑問は、粗ぼ解決せられたりと見做すも、差支なかるべし。然らば第二の疑問は、如何右の方針に違ひ一般地理學の記述の材料より歸納して得たる以上三篇の範圍を從來の地理書の材料の

範圍と認められたるものに對比するに、未だ全然一致せりととは言ふを憚かれども、僅少なる部分を除くの外は一致せりと云ふを得、即ち各地各國の地誌に於て其領域内のものとして一ツ一ツ記載し説明する地的影響の人生現象の大畧は以上の法則を適用し、演繹するによりて説明するを得、仍つて此等に關する吾人の智識は頗る整理せられ、從ひて之が爲めに要する吾人の心力は其等のものを切れ切りに會得し、記憶するに比すれば、遙かに經濟となり能ふと信ずるを得、若し夫れ此大畧の一致點に外る小部分の事柄に至りては、一方の概括が猶ほ及ばざりしか、然らざれば他方の材料が當を得ずして、寧ろ地理學の範圍外として排斥せらるべき運命にあるものかの如し。果して然らば社會の承認し、要求する契點は、恐らくは是にあらん。吾人は尙ほ前章に於て一般の科學の成立の順序上より地理學の當然到着せざるべからざる點を見出し、たりき。願れば吾人の企圖は、畧ぼ此點に近づけりといふの理由ありと思惟するを得、此等の見解にして誤りなからんか、吾人は茲に大なる自信を以て、次の定義を下

地理學の定義

す。地理學は地球の表面に一定の規律をなして分布する自然現象と人類生活現象とを關係の系統的智識なり。更に之を約言すれば地理學は地と人生との關係を説明する科學なり。

地理的分布  
地的現象

地理學の反面より  
の定義

所謂地理的分布なる語は地球の表面に一定の規律をなして分布することを意味するが如し。吾人は此かる自然現象を地的現象といふ。其中に所謂狹義の現象の外自然物、自然力等を包括すること言を俟たず。地的現象が地球上の各部分の住民の生活に特殊の種類と特殊の程度とを以て關係するが故に、人生現象にかりても自ら多少一定の規律をなして分布すべきは當然のことなり。されば地理學は反面より左の如く定義するを得べきか。地理學とは地理的分布をなす人生現象を説明する學をいふ。或は人生現象を更に限定して社會現象とせんかと思へど、未だ確信し得ざる所なり。

以上の定義の信用に對する尙ほ一の保證は、地理學發達の歴史上より内外諸大家の所説を明かにすることなるが、吾人の未だ分を充たす能はざる所且つ僅少の材料をも本書紙幅の許さざる所なれば、今は唯だ最も著しき一二を提擧するに止めんか。先づ地理學は人類の住處として地球を論ずる者との在來の定義なり。是には固より地人關係の思想を暗示する

や論なきも、而かも吾人の智識の領域を限定する上に於て甚だ曖昧に失するが如きことは從來の記載の地理學が之によりて何等改進の指針を得ざるにても知るを得、且つや住處てふ普通の觀念よりすれば、地理學の定義としては尙ほ足らざる所あるの感なき能はず。此ことは亦た有名なカール・リッテル氏が地理學は獨り地球の記述を以て足れりとすべからず、其最も重きを置いて研究すべき事項は實に地理と人類との關係及びその之に及ぼす影響にありと云ひて地理學發達に一新面目を開きしにて知るを得、人の云ふが如く、是れ實に斯學發達の前途に於ける、一大光明なり。吾人の希望する所は假令一步たりとも此理想の實現に近づかんとするに外ならず、余の淺學未だ其の大思想の内容に觸接する能はざるを憾む。従つて前の定義が果して其意を得べしや否やを知る能はず。然れども是れ吾人研究の到達點なり、吾人は斯學の爲めに學者の叱正を俟つや切なり。

第二節 地理學は科學なりや

傳へ聞く學問の淵藪たる獨逸國に於てすら今猶ほ地理學の科學たりや否やを疑ふものありと、地理學とは如何なる學ぞ、其名の示すが如く地理の概念と學問の概念との結合したるものにして學問中の一なり、されば此疑問は二ツの方面より決定さるべきもの、如し、即ち先づ地理學は學問なりや、學問ならば他の學問と對立すべき者か、是なり、前者は系統的智識なりや、否やの定まるにより、後者は他の學と區別せらるべき獨特の領域を有するや否やの定まるによりて決せらるべし、茲に一群の觀念ありて其等相互の間に秩序的關係なく雜然堆積せしのみならば智識とは稱せらるれど、未だ以て學とは見做されず、然るに其等の觀念の間に内容上、自然の關係ありて系統的に秩序正しく排列せらるるを得、從つて一定の原理、原則によりて其等の總てが説明せらるるならば、茲に始めて完全なる學問となる、翻つて所謂地理學を顧るに若しも地誌の如く、如何なる地域たるを問はず、各地方の自然界と人事界との事項を雜然記載して其都度々々に少し許りの説明を加ふるのみならば、未だ以て學問とは云

ふ能はず、然るに假令全然とは云ふ能はずとも、他の先進諸學の如く一定の法則によりて大體を説明し得るの望みあること前陳の如ければ、此點は既に明かなるべし、然らば、殘るは、他の一點のみ、地理學は他學と特殊の領域を有するか。

是に至つて勢ひ他の諸學科との關係を論ぜざる能はず、既に地的現象と人生現象との關係といふ、其中には當然地的現象并に人生現象の説明を豫料す、即ち地理學は此兩界現象説明の基礎の上に立たざるべからず、然るに此等の説明は夫々特殊の科學の任ずる所なれば、是に於てか地理學は非常に多くの學と關係を有するととなる、即ち以上各章の終りに列擧したる多くの諸學に關係を有し、而して其等の學とは其研究對象の一部分を等しうす、されば一々其等との領域限界を確定すべきなれど、是れ紙幅の許さざる所なれば、茲には其中の最も其限界の混雜し易き地文學自然地理學との異同を概観するを以て足れりとし、他は類推に譲らんとす、茲に言ふべき最も著しきことは、地文學は他の自然科学の或る物と等し

く就中重要に地理學の基礎をなす者なれども地理學の原理原則を與ふるものにあらず即ち彼れは他の學に於ける同しく但し最も多く豫備的智識を與ふるものなれども謂ふ所の地理學其物にあらずといふとなり蓋し地文學は殊更に人類との關係を考へずして地球を人生に何等の關係なき外物として記述し且つ其現象相互の關係を説明するに留まる故に偶々人類をも其中に入るれども之れ唯だ生物の一として數ふるのみ然るに地理學の目的は右の如くなれば等しく山を研究の對象としても彼れにありては其何故に生ぜしかそが他の自然現象に如何なる關係あるかといふことによりて記述すれども是にありてはそが人生に如何なる關係あるかによりて記載すざれば是にては若し山の起原山の種類等を詮索するを要すとせばそは唯だ人生との或る關係に於てのみ他のを問學上に如何に面白き事柄たりとも人類の生活に著しき關係なき以上は之を論ずるの要なし是れ唯だ一例のみ要するに地理學は他の多くの科學と其研究の對象の一部を等うすと雖も獨特の見地より觀察するが

故に自ら特殊の領域を有するなり但し此に言ふ地理學とは一般普通の呼稱に従ひしなることは前に辯せし所なり

### 第三十四章 地理學の豫期し得べき効果

吾人が地理學の總論に於て言はんと欲することは他の諸篇に於けるよりも多し然れども常に冊子の増大を恐れつゝ來りて猶ほ茲に至りたれば今は地理學の豫期し得べき効果として左の數項を概言して一先づ本書を結ばんとす吾人若し以上三十餘章の開陳を回想せんか之に對して多くの説明を加へずとも其至當なるを承認するを得べし先づ之を吾人日用の生活上より觀んか

- 一、地理學は吾人の日常生活に密接の關係ある事項より成立するが故に之によりて活社會の實相を知り生活上必須なる知識を得べきこと
- 二、右によりて日常起る所の處世上の問題を判斷するに要する所謂常識を養成するに獨特の効果あること
- 三、活動しつゝある現社會を認識せしむるによりて世界達觀の明を啓き

生活上の智識

常識

愛國心

會心

記憶力の養成

多方の觀察力養成

推定的考察法の練習

諸科學攻究の綜合

從ひて世界に於ける自國、自國に於ける郷里、郷里に於ける自己等の正當の位置を自覺せしむるが故に、公平にして着實なる愛國心、愛社會心を養成するに缺くべからざること。

是れなり、更に之を單に吾人心力の發育上のみより見るも。

一、記憶力の養成 是れ從來の地理學に於て往々過重せられ、以て他の更に有るなる効果の忘却せられし程なれば説明の要なかるべし。

二、地理學は吾人の住處の四周に於ける天然界及び人事界を直接に觀察して其基礎を造るべきものなるが故に一切の高尙なる心力の基礎にして而かも本邦人の最も缺點とする所の多方面に對する觀察力を養ふに獨特の長所あること。

三、學問上將た處世上の紛糾する難問の解決に適用せらるべき推定的考察の方法を最も手近なる平易の材料によりて練習し得べきこと。

の效果あり、而して又た一般國民を養成する普通教育の上よりすれば。

一、周圍の卑近の材料によりて教授の最要目的たる多方の興味を養成す

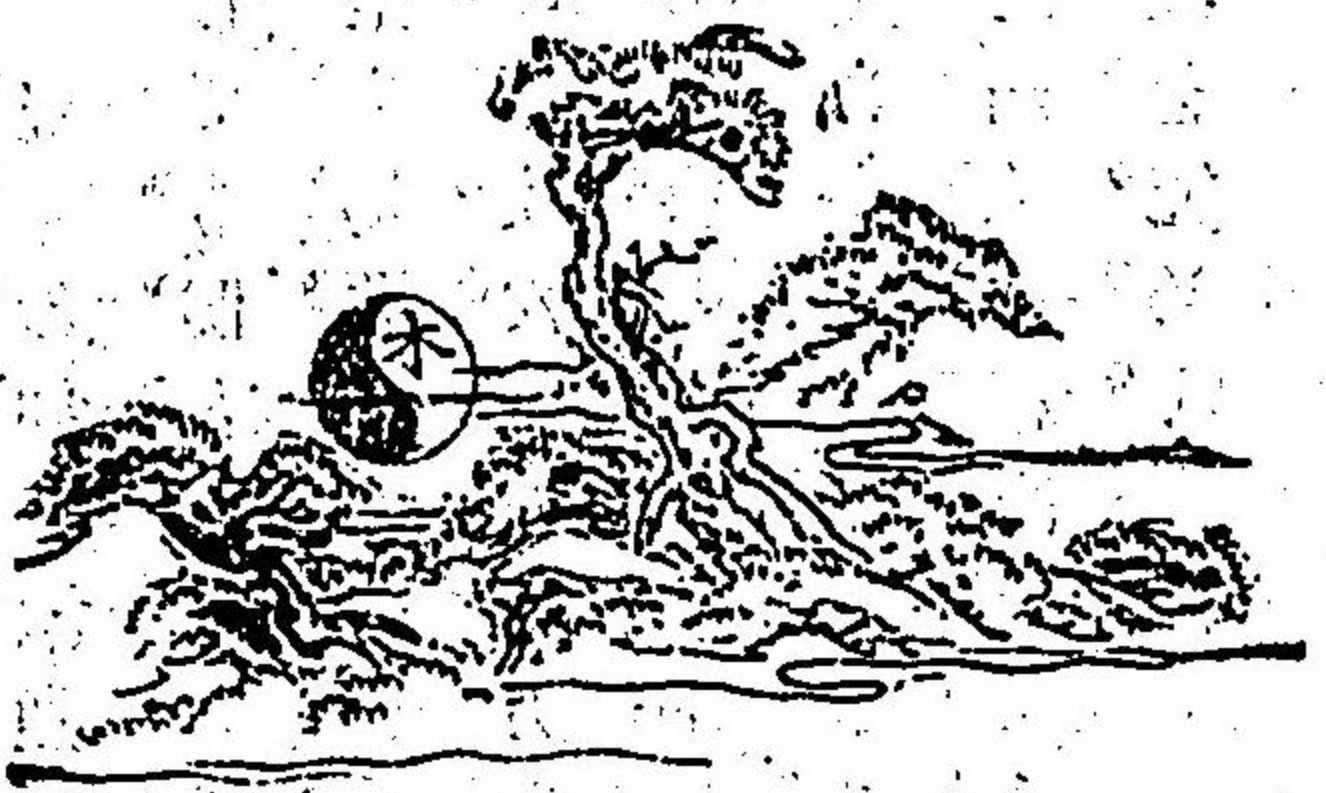
諸科學の知識の綜合

るを得るが故に、其れより分岐せる諸科學攻究の基礎を與ふると。

二、煩雜散漫なる多くの學科によりて學生の心意が混雜せらるゝの大弊ある現今の教育上に對し其等の知識を統合せしむる効あること。

之を要するに地理學は現今の如き激烈なる對外的生存競争の世界に於て生活する國民に對しても個人に對しても將た國民の養成を任とする普通教育に對しても最も切要缺くべからざる學科なりといふべし、吾人は信ず、刻下我教育法の痼疾たる觀察力の偏狹、教科の散漫及び學問と實用との甚しき疎隔等の弊害の大半は地理學の正當なる教授によりて醫せらるべきを、吾人は更に多くを言はざるべし、唯だ吉田松陰の一言を繰り返して本篇を結はん、曰く、地を離れて人なし、人を離れて事なし、人事を論せんとせば先づ地理を究めよ。

### 人生地理學終



大正十三年三月十日

小牧實敏

明治三十六年十月十二日第一版印刷

(人生地理學)

明治三十六年十月十五日第一版發行

定價金貳圓



著者

牧口常三郎

發行者

立田義元

發行者

生沼大造

印刷者

三島宇一郎

印刷所

同所 電話(本局二三一六番) 弘文堂

發行所

東京神田區  
小川町一番地

文會堂

東京神田區  
保町九番地

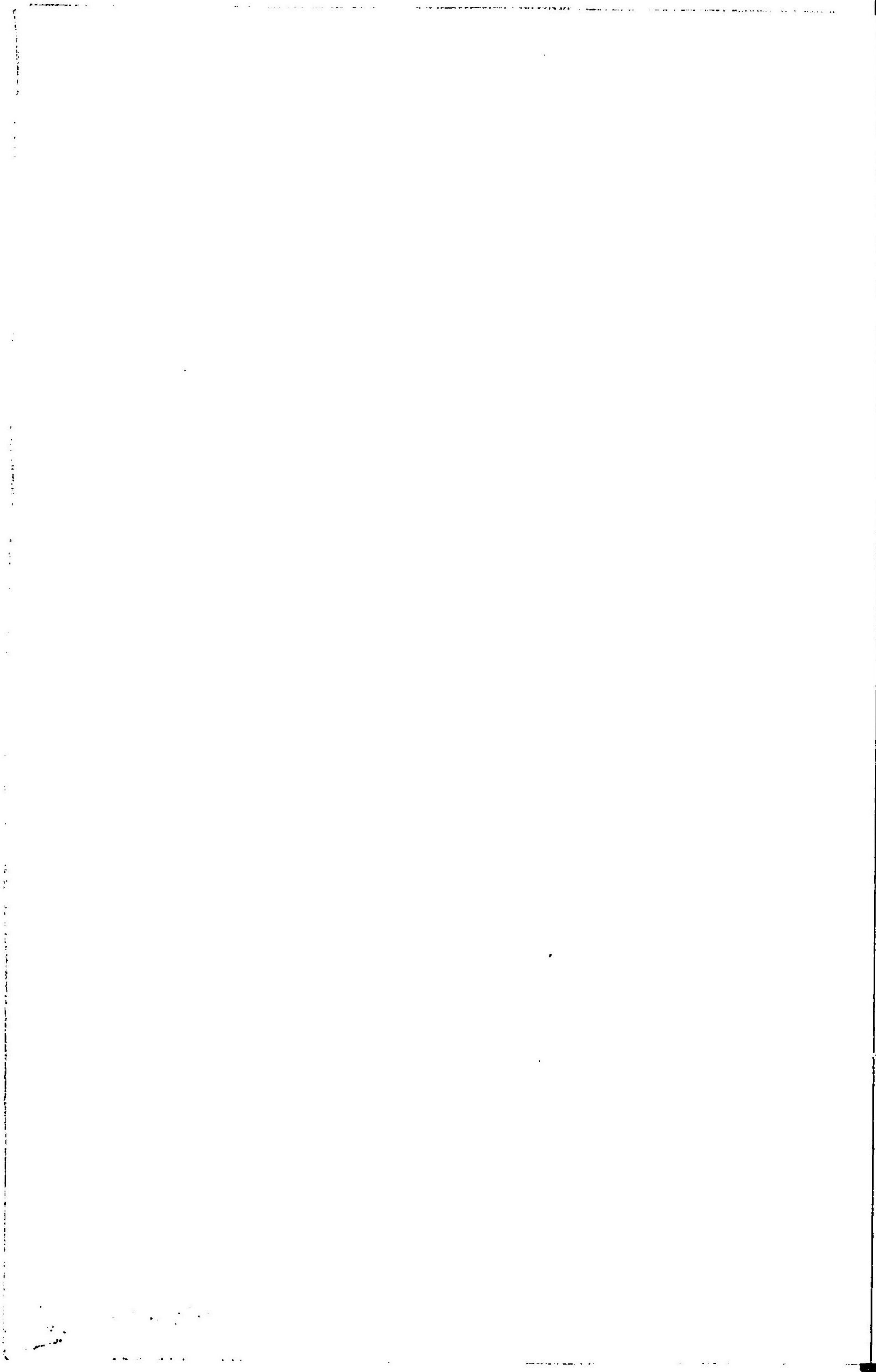
富山房

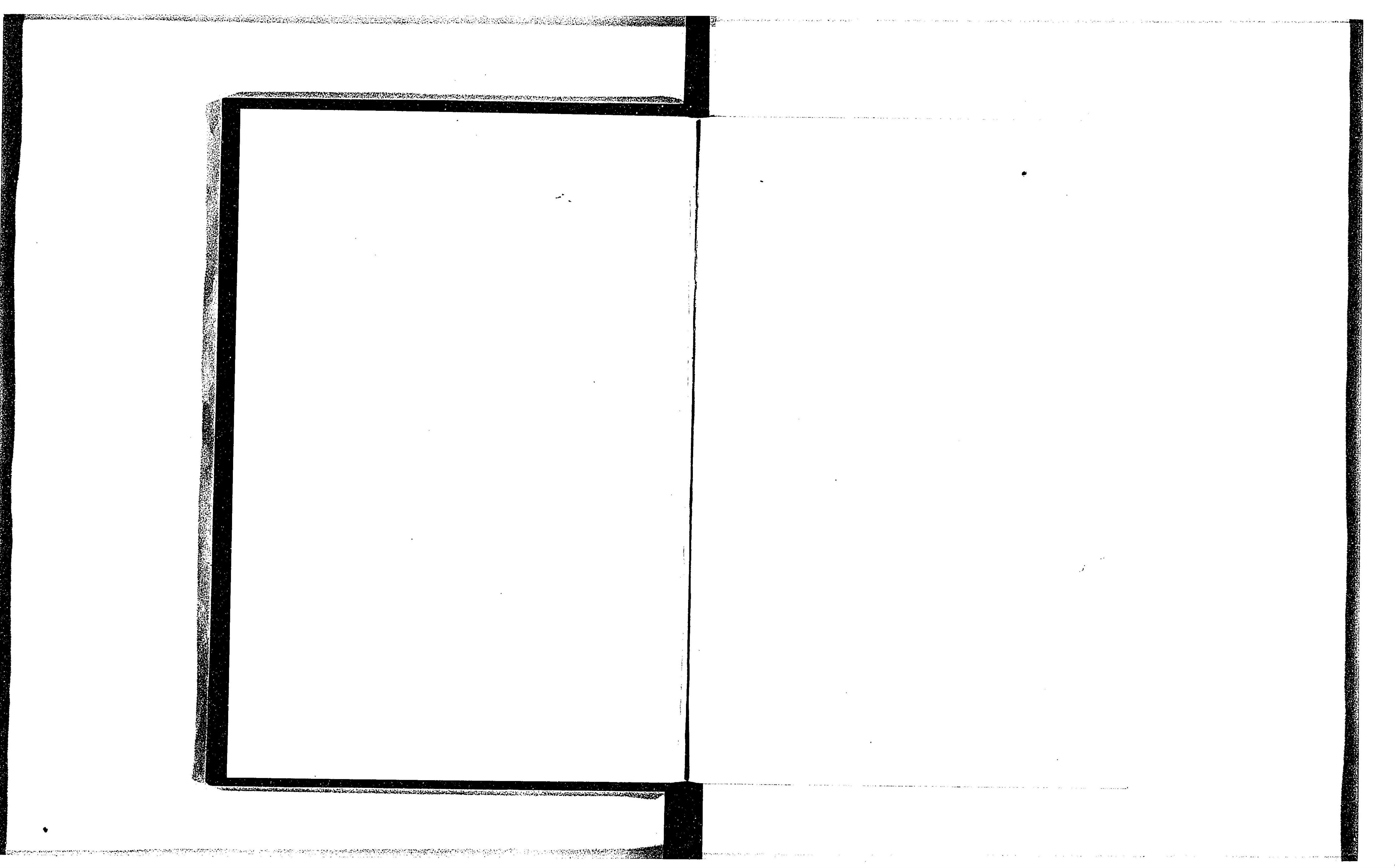
(電話本局一〇三六番)

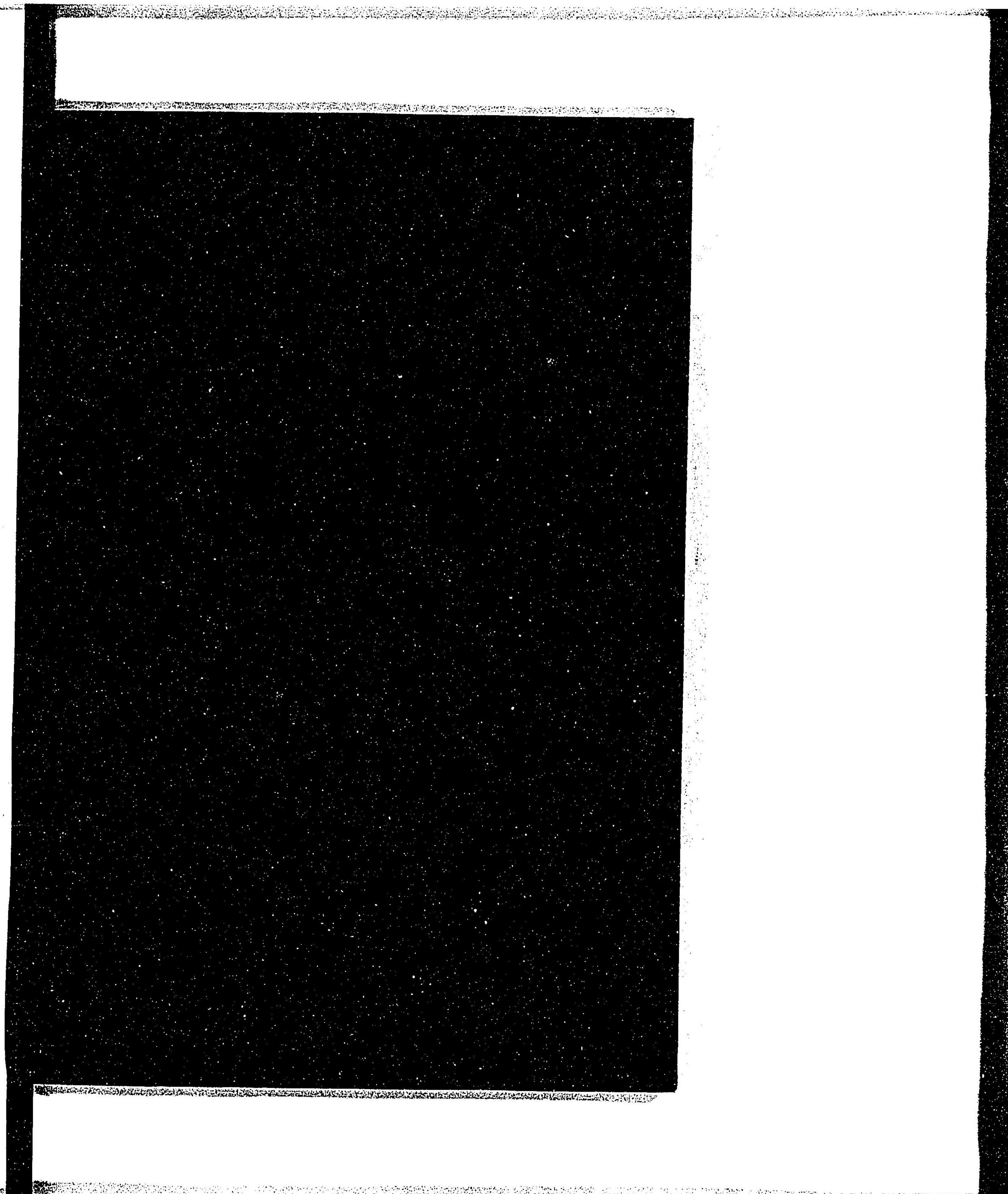












290.1  
M1543

(M)

021991-000-7

290.1-M1543

人生地理学

牧口 常三郎/著

M36

ADA-0251



